


在外研究員研究報告書

2019年10月4日 受付

所 属	グローバル地域文化学部		氏 名	石井香江 
職 名	准教授			
研究課題名	ドイツの父親の自助組織の成立と活動の分析			
研究期間	2018年3月31日 ~ 2019年3月30日			
滞在期間 ・滞在地 研究調査先	滞在期間	滞 在 地	研究・調査先	
	2018年3月31日 ? 2019年12月1日	ドイツ	トルトムント工科大学 (教育・心理・社会学部・ 社会学科)	
研究費	276.7 万円		研究成果の概要	別記 4,000字程度
発 表	題 目 名	発表学術誌名Vol. No.		発行年月日
	過剰な衣服の不可視化か? — Bエマーとジプシー — を めぐり記す急の政治	Gender and Sexuality Vol.14		2018年3月
	著 書 名	発 行 所 名		発行年月日
	電話交換手はなぜ 「女の仕事」にふさわしいのか — 技術とジプシー — の 日独比較社会史	ミネルヴァ書房		2018年5月
	演 題	講演学会名		講演年月日
	ドイツにおける男性史の 展開と課題	ジプシー史学会		2018年12月6日

在外研究報告

石井 香江（グローバル地域文化学部准教授）

2018年3月31日から同年12月1日まで、ドイツのドルトムント工科大学・教育・心理・社会学部社会学科にて在外研究を行いました。ドルトムントは、工業地帯のルール地方、ノルトライン＝ヴェストファーレン州にある、人口約59万人の都市です。ドルトムントとその周辺には炭鉱や醸造所など数多くの産業遺産がありますが、この地はかつて鉄鋼工業が栄え、世界有数のビール生産地でもありました。現在では、日本ではサッカーの香川真司選手がプレーしていたボルシア・ドルトムントの名でも知られているように、「労働者文化」の代表で、国民的スポーツもあるサッカーが盛んです。多くの労働移民を外から受け入れた産業を抱える歴史的背景から、住民の約三分の一は移民の背景を持っているそうです。

私を客員研究員として快く受け入れて下さったのは、ドイツ語圏で男性学・ジェンダー研究をリードする社会学者ミヒャエル・モイザー教授（ドルトムント工科大学・教育・心理・社会学部社会学科）です。彼が所属する社会学科には、モイザー教授の他にもドイツ社会の格差研究で知られる社会学者ニコル・ブルザン教授、知識社会学・現象学的社会学者として現在も活躍するロナルド・ヒツラー名誉教授、高齢化社会における世代間の連帯契約の研究をする社会学者マルティナ・ブランツ教授らが教鞭をとっており、若手研究者の研究活動が活発でした。同じ研究室の仲間であった一人が、社会学科は自然科学系の学部が中心の工科大学の中にありながら、競争的資金の獲得が学内でも国内でも高いレベルにあると誇らしげに教えてくれたほどです。ドルトムント工科大学・教育・心理・社会学部社会学科での研究生活に関しては、私が到着した頃にモイザー教授のもとで博士論文を執筆中であった研究員と、教授資格論文を執筆しながら、幾つかの授業を担当する研究者の三人で研究室を利用していただくために、何かあればすぐ相談することも可能で、日常生活を快適に過ごすことができました。もう一人の研究員は、普段は他の研究室で研究していましたが、私と研究関心が近いこともあり、頻繁に研究内容について議論し、今も研究交流が続いています。

今回の滞在では、日本にはできないこと、つまり普段日本で行っているような文献資料の読解ではなく、ドイツにいるからこそできる聞き取り調査を行うことを主たる目的としていました。今回の研究テーマは、「ドイツの父親の自助組織の成立過程と活動の分析」というもので、日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究（C）により2015年から行っている研究（「ドイツの「新しい父親」という男性性の構築——「子どものために決起する父親達」の分析」および「グローバル社会の男性性と働き方の構造転換——90年代ドイツにおける父親と労組の連携」）の総仕上げでもありました。1990年代以降目立つ父親の自助組織の成立過程と活動の背景には、父親に対する社会やパートナーからの期待、父親の自己認識の変化があるだろうという仮説を実証するために、父親ないし夫婦への聞き取りが不可欠となりました。調査経験もあり、ネットワークの広いモイザー教授も、私の調査活動を支えてくれました。最終的には40人近くにお話を聞くことになった本調査は、ドイツに住み育

児休業を取得中の父親ないし夫婦や、男性支援組織や管轄官庁の担当者の家や職場を訪問し、1時間から2時間にわたるインテンシヴな聞き取り調査とアンケート調査を行うというもので、北のベルリンから南のミュンヘンまでのドイツ全土を回ることになりました。資金的制約があったため、諸々の段取りから通訳の役目までのすべてを自分で担当することになりましたが、だからこそ、限りある時間の中で、通訳を介しては伝わりにくいであろう込み入った事柄について、しかも英語ではなく相手が普段使っているドイツ語によって、かなりダイレクトに語ってもらうことができたように思います。すべてのインタビューの書き起こしは業者に依頼し、完成しています。モイザー教授とその研究員、日本の研究者も含めたメンバーで構成される今年8月より始まった共同研究グループ（日独の男性性とケアをめぐる研究会）では、「グローバル化の中で、ケア労働のジェンダー平等は可能なのか」という観点から、このインタビュー結果を現在分析中です。モイザー教授とその研究員は再来年来日予定で、この共同研究グループでシンポジウムやワークショップを企画しています。

滞在は調査だけに終わるものではなく、研究交流も積極的に行うことができました。日本人コミュニティがあることで知られるノルトライン＝ヴェストファーレン州にある大都市デュッセルドルフの公文センター（KUMON-Lerncenter Düsseldorf-Oberkassel）で定期的開催されているカルチャー・カフェにて、また、母校であるベルリン・フンボルト大学ヨーロッパ民族学科内のジェンダー研究コロキウム（GenderQueer in der ethnografischen Forschung/Humboldt-Universität zu Berlin, Institut für Europäische Ethnologie）にて、自著をもとにした研究報告の機会を得て、貴重な意見を頂くことになりました。

12月に帰国してからは調査結果のまとめや日本に住み育児休暇を取得する父親ないし夫婦を対象に同じ項目を含む調査を関東・関西エリアで行い、現在も継続中です。普段は中々研究時間が取れないのですが、在外研究期間、そして帰国後の国内研究期間には、国内での調査はもちろん、依頼された論文や研究動向の執筆・校正、依頼された書評やエッセーの執筆・校正、学会での研究報告、自著の書評会でのリプライにも時間を割け、時間はもちろん精神的な余裕ができたおかげで、研究活動が再開できました。また、在外研究期間中にドイツの社会学会に参加し、欧州の社会学者と研究交流が持てたことで、今学期から始まる新しい授業やゼミに活用できる最新の研究成果のカバーなども行えました。グローバル地域文化化学部の学生にとって重要なグローバル・ソシオロジーやジェンダー・ヒストリーに関して、日本語で読める良質の関連書籍はまだ少なく、こうしたテーマの担当教員である私自身が英語やドイツ語の関連図書のリストの作成や精査は不可欠なのですが、普段は学務で忙しく余裕がないので、今回のように研究時間が与えられなければ不可能であったと考えます。

8ヶ月の在外研究期間（それに加えて4ヶ月の国内研究期間）は短かったですが、日本で生活していただけでは得られない見聞があり貴重なものでした。何より大学院生のような立場を再び経験できたことは、アカデミックな世界でも一層進展している厳しいグローバルな状況を自ら体感する上でも有益でした。この貴重な経験と知見を、同志社における授業やゼミでフィードバックすることで、学生の学びにも資することができれば幸いです。